

国内実態調査報告書

テーマ : 長崎市および市内炭鉱業・造船重機産業実態調査
ゼミ名 : 村上 研一ゼミ (日本経済論)
調査日 : 2019年9月17日(火)～9月19日(木)
調査先 : 長崎原爆資料館、三菱重工長崎事業所ほか
授業科目名 : 演習Ⅰ・Ⅱ
参加学生数 : 16人(3年生)

調査の趣旨(目的)

戦前は、とりわけ炭鉱業・造船業の拠点として三菱財閥が拠点を置いた産業都市として発展し、現代日本の重化学工業の基盤を形成した長崎市の産業遺産の見学を通して、我が国の重化学工業の性格と課題について。また、重化学工業発展と人々の暮らしとの関係について。さらには原爆被害を被り、戦後は世界平和を希求する市民の活動について。これらのことを、現地での実態見学を通してリアルに学び、近代・現代の日本社会・経済の成り立ちと性格、課題について考えることを目的とした。

調査結果

第1日目(17日)は長崎市入りし、原爆資料館と平和公園を見学した。原爆資料館では、深刻な原爆被害の実態を学ぶことができた。多くの学生にとって展示内容は衝撃的であったが、長崎の原爆被害者の多くが女性や老人、子どもたちなど非戦闘員であり、科学技術の発達した現代における戦争が、こうした罪もない人々の命を残酷に奪うことを学び、平和の尊さを改めて実感できたものと思われる。

第2日目(18日)は、長崎市西南海上の高島・端島(通称・軍艦島)炭鉱遺跡の実態調査を行った。明治以来、海底炭田として開発され、三菱財閥に巨万の利得をもたらした高島、端島の元炭鉱の大きなスケールを実感するとともに、上陸した端島では、今は廃墟となった炭鉱街の実態を見学した。端島の炭鉱都市の見学からは、炭産第一・生活第二、すなわち、人々の生活が産業発展のために捧げられ、犠牲にもされた当時の時代状況も知ることができた。さらに、長崎港から高島・端島へと往復する海上からは、三菱重工長崎事業所の造船施設を詳細に見学することができ、造船業の施設・設備の実態が明らかになった。



第3日目（19日）は、三菱重工長崎事業所内の見学・実態調査を行った。ここでは、明治期以来、同事業所で製作されてきた船舶や船用機械はじめとする重機に触れ、製品の発展・深化とともにその生産過程の実態について知ることもできた。また、日本の経済発展・産業技術発展とともに移り変わってきた製品の特性とともに、培われてきた技術・技能の継承の課題についても知見を得ることができた。

今回の合宿を通して、石炭・造船を中心に発展してきた一大産業都市としての長崎、また甚大な原爆被害を被り、戦後は平和都市として世界に発信を続けている長崎市と市民の思いを学ぶことができ、とても有意義な実態調査となったと思われる。

